全国の先進的な取組事例

先進的な取組を行い成功した事例では、以下の環境が整っていることが多い。

・当該文化芸術ジャンルを進める土壌や風土があった。
・文化芸術活動者と行政側の取組が投合した／行政側が積極的に対応した。
・強力に推し進めることができるキーマンが存在した。
・行政側が明確な指針を明示し、戦略的に推し進めた。

①クラシック音楽関連の著名な事例

事例１：地方都市で世界的なクラシック音楽フェスティバルを実施（松本市）
日本国内のみならず世界的にも著名なクラシック音楽の祭典「セイジ・オザワ・松本フェスティバル」を 30 年以上に亘って開催。クラシック系の音楽イベントでは我が国最大の成功例。
→サイトウ・キネン・オーケストラ側からの引き合いに、市・県が積極的に対応

項目	概要
事業・団体名称	セイジ・オザワ 松本フェスティバル 主催：セイジ・オザワ 松本フェスティバル実行委員会／公益財団法人サイトウ・キネン財団 共催：長野県／松本市
事業概要	▶毎年８～９月の１ヵ月間に松本市を舞台にオーケストラ、オペラ、室内楽、室内楽勉強会など 10 数公演を行う我が国を代表するクラシック音楽のフェスティバル。2022 年の鑑賞者合計 71,870 人。会場は松本市音楽文化ホール、まつもと市民芸術（キッセイ文化ホール）など。 ▶1992 年にサイトウ・キネン・フェスティバルとして開始、2015 年から現名称に変更。
事業実施経緯	① スズキ・メソード 帝国音楽学校のヴァイオリン教授であった鈴木鎮一が開発した教育法で、1946 年に松本市に設立された松本音楽院を本拠地にスタートし、日本、アメリカなどで教育活動が展開されている。現在、公益社団法人才能教育研究会によって国内１万人、海外 40 万人程度が音楽教室に参加している（松本音楽院は松本支部となっている）。松本支部には全世界から著名な弦楽奏者が訪れてきており、また、桐朋学園の創設者の一人の斎藤秀雄（鈴木鎮一の親友）や桐朋学園の学長を務めた江藤俊哉（鈴木鎮一の門人）など桐朋学園関係者と関係が深い。 ② 桐朋学園の志賀高原合宿 斎藤秀雄は桐朋学園のオーケストラ練習として志賀高原での合宿を度々実施、生前最後の合宿も志賀高原で、弟子の小澤征爾も参加していた。 ③ サイトウ・キネン・オーケストラ 桐朋学園の創設者の一人であり、斎藤メソッドと呼ばれる教育方を確立した斎藤秀雄の弟子の一人である小澤征爾が、斎藤秀雄の没後 10 年を記念して門下生 100 余名を集めて実施したメモリアル・コンサートを契機に発足。その後 1987 年からヨーロッパツアーを実施し、世界的に著名なオーケストラになった。

	④サイトウ・キネン・フェスティバル 斎藤秀雄の生誕 90 年を記念し、本拠地を定めた定期フェスティバルを実施することとして 1992 年に開始。また、あわせて主催団体の公益財団法人サイトウ・キネン財団が設立された。 松本市になった要因としては、 ・ザルツブルク音楽祭のように自然の中で音楽祭をやりたいという小澤征爾の意向から、桐朋学園の志賀高原合宿などで馴染みがあった松本市が候補にあがった。 ・本格的なクラシック専用の松本市音楽文化ホールが 1985 年に開館しており、サイトウ・キネン・フェスティバル開始年の 1992 年に長野県松本文化会館がオープンするなど、フェスティバル実施に最適な環境が行政によって準備されていた。 ことなどが指摘される。

事例２：戦後初めて地域ぐるみで交響楽団を育成（高崎市）

高崎市の群馬交響楽団は、アマチュア時代を含めると最初にできた地方オケであり、はじめて全国的に有名になった地方オケでもある。学校へのアウトリーチ事業を最初に始めた事例としても著名。

→地域経済界の大立て者と市民が立ち上げ、市・県と学校事業を通じて連携。

項目	概要
事業・団体名称	公益財団法人　群馬交響楽団 理事長　群馬県知事 副理事長　副知事　高崎市長　群馬県議　上毛新聞社会長　群馬銀行頭取
事業概要	▶高崎市立のホール（高崎芸術劇場、群馬音楽センター、高崎市文化会館）での定期演奏会、群馬県内や栃木県内での演奏会、東京での演奏会、企業・団体からの依頼演奏会と小中高校・幼稚園・保育園へのアウトリーチ、小中学校の吹奏楽部での楽器セミナーなどを実施。 ▶1945 年に市民オケとして発足、47 年プロ化、49 年財団法人化、1950 年より群馬県・高崎市双方からの補助金交付団体に。
事業実施経緯	・戦後、高崎市民オーケストラとして立ち上げられた。中心となったのは地元実業家であり、建築家のアントニン・レーモンドやブルーノ・タウトとも親交があった文化人でもあった井上房一郎。井上は、後述する群馬音楽センターの建設に尽力した。 ・1947 年、プロ化と同時に、小学校への移動音楽教室事業を開始。これを契機に 1950 年から県と高崎市との支援を受けるようになった。移動音楽教室事業は、日本の同種の事業の先駆けであり、現在でも著名。 ・1952 年、戦後からの立ち上げと音楽教室事業開催の経緯を描いた映画「ここに泉あり」の企画がヒット、1956 年、映画のヒットを機に群馬県が文部省から「音楽モデル県」に指定され、高崎市がオーケストラの街として著名になる。 ・1961 年、アントニン・レーモンド設計（井上房一郎の尽力）の群馬音楽センターが群馬交響楽団の本拠地として竣工する（2019 年より本拠地は高崎芸術劇場に移転）。市の予算２億円と、市民からの寄附１億円を投じて高崎市が総力を結集してつくったホール。日本のモダニズム建築の代表作のひとつ。

事例３：老舗のオーケストラをフランチャイズに地域で音楽を振興（墨田区）

すみだトリフォニーホールは、小澤征爾が率いていた新日本フィルハーモニー交響楽団がフランチャイズするクラシック専用ホール。近年増加している民間オケと地方自治体ホールとのフランチャイズ契約の先駆け。

→文化施設建設構想と第九イベントの実施が民間オケとの繋がりを生む。

項目	概要
事業・団体名称	すみだトリフォニーホールを核とする音楽等の振興事業 （新日本フィルハーモニー交響楽団＆墨田区文化振興財団） 公益財団法人新日本フィルハーモニー交響楽団は 1972 年設立の民間オケ 公益財団法人墨田区文化振興財団は墨田区の 100%出捐財団
事業概要	①公益財団法人　新日本フィルハーモニー交響楽団 ▶1988 年に墨田区と新日本フィルハーモニーでフランチャイズ契約を結び、1989 年より墨田区での活動を開始。また、1997 年トリフォニーホール竣工後は、同ホールでの演奏会も多数実施。小中学校でのコミュニティコンサート、福祉施設でのふれあいコンサート、小中学校への出前授業、乳幼児向けコンサート、ワークショップ、成人式でのコンサート、トリフォニーホール・ジュニア・オーケストラの演奏指導、墨田区民の招待など。 ※新日本フィルでは、三重県文化会館、可児市文化創造センター ala とも契約を結び、事業を実施している。 ②公益財団法人墨田区文化振興財団 ▶2000 年に設立。すみだトリフォニーホールを核とする音楽の振興事業、すみだ北斎美術館を核とする美術等の振興事業、その他区内団体への助成やウェブサイト運営などを行う。 ▶音楽の振興事業としては、トリフォニーホールでの新日本フィルを中心とした公演事業（一部他のピアニストや交響楽団等の公演、能、ジャズなどあり）、新日本フィルのアウトリーチ事業やバックステージツアーを実施。
事業実施経緯	・1981 年、墨田区基本計画に基づく長期総合計画で「大文化会館建設構想」を計画。墨東副都心として今後発展の期待される錦糸町駅周辺に、個性豊かな大規模な文化会館を建設することとなった。 ・1985 年、両国国技館落成の祝賀の記念として、墨田区文化観光協会が、「国技館 5000 人の第九コンサート」を墨田区主催で開催した。 ・上記の成功を機に、1988 年に「墨田音楽都市構想」が立ち上げられ、墨田区と新日本フィルハーモニー交響楽団との間でフランチャイズ覚書が提携された。この時から、新日本フィルのアウトリーチ活動など区に対する事業がスタート。 ・1997 年、大文化会館建設構想に基づく「すみだトリフォニーホール」が竣工、新日本フィルハーモニーのフランチャイズとしての活動が本格的に始まった。

事例４：日本ではじめて世界的音楽祭を誘致、地域集客の要に（札幌市）

故レナード・バーンスタインが設立した「パシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）」を誘致。日本最初の世界的音楽祭として定着させ、市の文化観光の目玉に。

→PMF 側の唐突な申出に急遽対応。背景には市のイベント集客施策とバブル期のメセナブームがあった。

項目	概要
事業・団体名称	パシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF） 公益財団法人パシフィック・ミュージック・フェスティバル組織委員会
事業概要	▶カラヤン亡き後、最大の指揮者といわれたレナード・バーンスタインが環太平洋地域で教育音楽祭を実施したいとし、ロンドン交響楽団とともに 1990 年に第１回を札幌市芸術の森他で開催。開催直後にバーンスタインは亡くなったが、遺志を継ぎ、現在まで世界三大教育音楽祭として継続。 ▶事業の内容は、札幌芸術の森で行われる欧米の主要オケの奏者やソリストが集まり、若手プロ向けに世界最高水準のオーケストラ教育を実施する「PMF アカデミー」と、札幌コンサートホール Kitara などを中心に行われる「演奏会部門」よりなる。その他、関連事業として普及啓発型のコンサートや地元の学校・学生向けの講座、実技指導などが実施されている。
事業実施経緯	・レナード・バーンスタイン（アメリカを代表する指揮者で、世界的なオケの指揮者を歴任。ウェスト・サイド・ストーリーの作曲者としても有名）が、ボストンの「タングルウッド音楽祭」と同じ教育音楽祭（クラシックの若手を育成する音楽祭）を環太平洋地域でも展開しようとしたことが契機。当初は北京での実施を予定していたが、1989 年に天安門事件が勃発したため、企画が宙に浮いてしまい、代替場所を探していた。 ・当時、札幌市では、1977 年に札幌青年会議所が提唱した「札幌アートパーク構想」に基づき 1986 年に「札幌芸術の森」を竣工させており、会場の用意ができているとともに、芸術による集客強化という市の方針にも則っていたことから急遽受け入れを決定した。1990 年当時は企業メセナの最盛期（企業メセナ協議会発足年）であったこともあり、企業協賛金も期待できた。 ・第１回開催直後、バーンスタインが急死したため、継続が危ぶまれたが、札幌市が継続に強い熱意をもっていたことなどから、第２回以降の開催が決定され、現在では、タングルウッド音楽祭（アメリカ）、シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン音楽祭（ドイツ）とともに、世界三大教育音楽祭という地位を確立している。

②その他の芸術分野での著名な事例

事例５：地域の農山村を舞台に世界的な美術トリエンナーレを開発（越後妻有）

世界的に有名なサイト・スペシフィック・アートのトリエンナーレ。全く普通の里山を、アートで大きな観光資源を持つ土地に変換し、国内外から大規模集客を実現。「瀬戸内国際芸術祭」など同種のトリエンナーレの先駆者。

→県の地域振興プランに地域が応募したことがきっかけ。世界と通じるアート・ディレクターと二人三脚で地域密着の体制を数年がかりで実現。

項目	概要
事業・団体名称	大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 主催：大地の芸術祭実行委員会　共催：NPO 法人 越後妻有里山協働機構 実行委員長十日町市市長、副実行委員長津南町町長　名誉実行委員長県知事
事業概要	▶2000 年開始。越後妻有地域（十日町市と津南町）の里山に、国内外の著名なアーティストが、そこの場所（建物、自然、農地など）でしか作れないオリジナルのアートを作成し、展示するサイト・スペシフィック・アートのトリエンナーレ。同種の美術祭としては世界的にも先駆性が高く著名なため、毎回、海外を含め、50 万人以上の集客を実現している。 ▶越後妻有地域全体が会場であり、訪れた人は、バスや自家用車で各作品をツアーしていく。毎回 300 作品以上が展示され、一部は恒久的な作品としてそのまま保存されている。３年ごとの本番以外にも、冬のツアーなど、毎年各種の事業が行われている。運営には全国から美大生が数百人単位でボランティア参加。 ▶開催を重ねるに従い、レストラン、展示施設、ステージ施設などの拠点施設、学校向け合宿施設、サッカーチーム拠点施設など多数の施設が作られ、年間を通じて交流人口が拡大している。
事業実施経緯	・1996 年に新潟県で広域連携と地域活性化を目指す事業として「ニューにいがた里創プラン」が打ち出された。これは市町村が広域連携する場合、事業費の 60%まで（最大６億円）を県が助成するもので、これに十日町地域広域市町村圏が応募した。 ・応募にあたって、十日町地域広域市町村圏では、新潟県上越市出身で、立川市でのパブリック・アートのプロジェクトの展開（ファーレ立川アート）や、県内上越市の地域振興プロジェクト花・ロードなどで実績のあったアート・ディレクターの北川フラムを起用。 ・当初は、「越後妻有８万人のステキ発見事業」、「花の道事業」などの地域振興プロジェクトを実施。その中で地域資源を有効に活用するためにはアートが有効という合意が行政内に生まれ、「越後妻有アートネックレス整備構想」となり、ここから大地の芸術祭が始まる。 ・北川フラムは、大地の芸術祭の成功を皮切りに、「瀬戸内国際芸術祭」、「北アルプス国際芸術祭」、「奥能登国際芸術祭」と日本を代表するトリエンナーレを、総合プロデューサーとして、次々と立ち上げている。

事例６：山村を舞台に日本初の世界演劇祭を開始、地域継続の要に（南礪市利賀村）

過疎化の進む山村に日本を代表する劇団のひとつである SCOT が移転。国内外から演劇人、演劇ファンを集める演劇の聖地に。

→村が地域振興用に用意した合掌造りの古民家を、世界的な活躍をしていた SCOT が拠点として選んだことがきっかけ。山村ではありえない集客を実現したことで、村側が地域に必須のものとして認識し、最終的に県の施策に。

項目	概要
事業・団体名称	劇団 SCOT/富山県立利賀芸術公園 公益財団法人利賀文化会議　公益財団法人 富山県文化振興財団
事業概要	▶SCOT（Suzuki Company of Toga）は、早稲田小劇場として鈴木忠志を中心に、別役実等が 1966 年に立ち上げた劇団。小劇場運動の第一世代として、寺山修司の天井桟敷、唐十郎の状況劇場等とともに演劇界を牽引した。1976 年に利賀村に移転し、劇団名を SCOT に改称。施設は、移転当時は利賀村の村有施設であったが、1994 年に県に移転され、大幅に拡充、芸術公園となった。 ▶富山県立利賀芸術公園は、SCOT の様々な作品が創造される拠点となっているとともに、毎年夏に演劇フェスティバル「SCOT サマーシーズン」を実施、また若手演劇人を教える「利賀・鈴木演劇塾」、文化人フォーラムである「利賀文化会議」が行われている。 ▶富山県立利賀芸術公園内の施設としては、古い合掌造りを劇場に改造した「利賀山房」、新たに合掌造りで建設した「新利賀山房」、古代ギリシアに原型を求めた本格的な「野外劇場」、富山県立利賀少年自然の家を劇場や稽古場、会議室、宿泊施設をもつ総合的な文化施設に改装した「利賀創造交流館･芸術劇場」、野外小劇場「岩舞台」、磯崎新設計の交流施設・図書館「利賀スタジオ」、宿舎、本部棟など多数の施設が建ち並ぶ。 ※芸術公園の指定管理は公益財団法人富山県文化振興財団が行っており、「SCOT サマーシーズン」や「利賀・鈴木演劇塾」も県財団の事業として実施されている。
事業実施経緯	・利賀村では、地域振興策として、1973 年、5 棟の合掌造りを百瀬川流域に集め、「利賀合掌文化村」と名付け、村有施設として運営を開始。 ・1976 年、早稲田小劇場の鈴木忠志は、それまで拠点としていた新宿区戸塚町の小劇場が契約解消になったため新たな拠点を探していた折に利賀合掌文化村の話を聞き、現地を訪問。劇団の拠点としての活用を決定、東京から利賀村に移転した。同時に劇団名を SCOT に変更、1976 年 8 月 28 日に開場記念公演を実施し、過疎の村に 600 人もの観客を集めたことで話題を呼ぶ。これ以降、利賀村は、毎年夏に 1 回の公演を行うとともに、1972 年から世界でも公演を行っていた SCOT の創造拠点となった。 ・1980 年、5 年契約の終了にあたって、利賀村はそれまでの村では考えられなかった SCOT の活動を評価し、磯崎新設計の新たな合掌劇場を建設した。これを受けて、SCOT では、1982 年より日本はじめての国際演劇祭「利賀フェスティバル」の開催をスタートさせる（現在は「SCOT サマーシーズン」に改組）。また、1983 年には、鈴木が創出した俳優訓練法スズキ・トレーニング・メソッドを教える「利賀国際演劇夏季大学」をスタートさせた（現在は「利賀・鈴木演劇塾」）。 ・その後、1994 年には、施設は富山県に移管され、合掌文化村は、富山県立の利賀芸術公園となる。富山県、南砺市（旧利賀村）によって、劇場、稽古場、宿舎などが次々と整備され現在にいたる。

事例７：市民の力で日本最大のアマチュア・ジャズ・フェスを実現（仙台市）

商業型のジャズ・フェスが退潮していく中、市民の力で、アマチュア主体のジャズ・フェス「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」がスタート、地域おこし型の新しいジャズ・フェスの最大の成功例に。

→市民が起点の街角無料イベント。市は最初財団経由で助成しているだけだったが、町おこしイベントとして成長するに従い、市経済局の直轄事業扱いに。

項目	概要
事業・団体名称	定禅寺ストリートジャズフェスティバル 公益社団法人定禅寺ストリートジャズフェスティバル協会
事業概要	▶毎年９月の２日間、「市民ボランティアが中心となって運営」「無料」「街が舞台装置」をキーワードに定禅寺通り、西公園通り等周辺の広場や公園などで、ジャズだけでなく、様々な音楽をアマチュア主体のバンドが演奏。2022 年度は、86 グループ、480 人が演奏し、総客数は 20 万人。 ※これまでの最大観客数は 2008 年の約 75 万人。 ▶2002 年「第 24 回 サントリー地域文化賞」、2006 年 NHK「第 24 回 東北ふるさと賞」、地方新聞社 52 社・共同通信社「第 2 回地域再生大賞」準大賞 、日本経済新聞 NIKKEI STYLE「街ごと楽しむジャズフェス 10 選」全国 1 位 など、地域おこし型の文化事業として高い評価を受けている。
事業実施経緯	・仙台では、占領期、進駐した米軍の社交クラブでジャズが盛んに演奏されており、その伝統から、1970 年代までは国分町を中心にキャバレーやバーで生演奏をするジャズバンドが多かった。また、1987 年から 1990 年まで、民間のジャズ・フェスも一時的に行われていた。 ・上記の流れを踏まえ、1991 年、音楽家、商店街の店主、定禅寺通りの街づくり関係者により、参加ミュージシャン 25 グループ 150 人で現在に続く定禅寺ストリートジャズフェスティバルが開始されることとなった。 ・市民による実行委員会（当初は任意団体）でのイベントであったが、91 年時点より仙台市市民文化事業団の助成を受け、さらに 2001 年からは市を代表する観光イベントとして仙台市経済局から直接の補助を受ける事業となっている。

事例８：首長の思いから始まった大道芸が、市民を巻き込み、アジア最大級に（静岡市）

「大道芸ワールドカップ in 静岡」では、当初より、運営や大道芸自体への市民参加の仕組みを徹底して実施。結果、現在では、多くの市民に支えられるアジア最大級イベントに。

→市長肝いりで開始したイベントが、優秀なプロデューサーを得て、次第に市民・地域全体が支える目玉事業に。

項目	概要
事業・団体名称	大道芸ワールドカップ in 静岡
事業概要	▶例年文化の日を含む 11 月初旬の４日間に駿府城公園、常磐公園、青葉シンボルロード、呉服町、七間町等の市中心部と、駿河区と清水区のサテライト会場で実施されている日本最大の大道芸フェスティバル。基本は路上や公園での無料パフォーマンスだが、一部会場での有料公演がある。また、世界中から集まる大道芸人のチャンピオンを決めるコンテストも実施されている。例年 150 万人程度を集客していたが、コロナあけの 2023 年は 118 万人に止まった。 ▶運営は、市が募集する市民ボランティアスタッフ、市役所・協賛企業などから応援派遣される職員で行われている。また、ピエロの研修を受けた「市民クラウン」が、道案内をしたり、一緒に写真を撮ったりなど、市内各所で活躍している。 ▶市民側も大道芸慣れをしており、誰もが戸惑いなく投げ銭を行うなど、市民文化として大道芸や路上パフォーマンスが定着している。
事業実施経緯	・当時静岡市長であった天野進吾が立案、1992 年に開催にこぎ着けた。プロデューサーは甲賀雅章（2017 年まで大道芸ワールドカップ in 静岡プロデューサー／静岡出身）で、ボランティア中心の運営体制で実施していることも特徴（２回目以降）。 ・当初から海外アーティストを積極的に誘致してきた結果、開催 10 年までに海外からのオファーが数多く来るようになる。また、2000 年には観客数が 150 万人を突破し、アジア最大規模の大道芸フェスティバルに成長した。 ・現在では、こうした大道芸フェスの成功を受け、静岡市の文化芸術施策自体が、街角どこでも文化芸術を体験できる「まちは劇場」施策として進化している（観光交流文化局まちは劇場推進課）。

④　**教育、福祉など他分野連携での有名な事例**

事例９：アート NPO の実績・ノウハウを活かし、学校アウトリーチ向けの先駆的なプラットフォームを構築（横浜市）

横浜市では、学校へのアウトリーチについて、多様なアーティスト・文化団体が、学校側に大きな負担をかけることなく、アウトリーチができる仕組み「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」を構築し、学校連携「アーティストが学校へ」を推進している。

→民間のアート NPO の提言を市側が受け止め、先駆的なアウトリーチの仕組みを開発。

項目	概要
事業・団体名称	横浜市芸術文化教育プラットフォーム「アーティストが学校へ」 認定ＮＰＯ法人ＳＴスポット横浜　公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 横浜市教育委員会　横浜市にぎわいスポーツ文化局
事業概要	▶「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」は、市の文化部署（芸術文化振興財団）が、教育委員会の協力を受けて、市内の学校に音楽・演劇・ダンス・伝統芸能など多様なアウトリーチを届けるもので、特徴として、ひとつひとつのアウトリーチについて、学校側とアウトリーチ団体側をつなぐ「コーディネーター」を配置していることがある、これにより、受け入れ側の学校の負担が少なく、文化芸術団体側が活動しやすい環境の整備に成功している。 ▶コーディネーターとしては、市内の民間のアート NPO や文化団体、文化施設がネットワーク化されている。各コーディネーターは、学校からどのようなアウトリーチにしたいか希望を聞き、それに合わせてプログラムを作り、アーティストを選定・招聘し、実施する。 ▶2022 年度は計 170 校、12,799 人の児童・生徒向けに実施（開始年度の 2008 年の 6 校から 14 年で 30 倍近くに拡大）。
事業実施経緯	・きっかけは、アート NPO 団体 ST スポット横浜が、2004 年に神奈川県の「かながわボランタリー活動推進基金 21」に申請し、「アートを活用した新しい教育活動の構築事業」を神奈川県県民部文化課、教育局子ども教育支援課・高等教育課と協働で実施したこと。 ・上記の実績を踏まえ、横浜市芸術文化振興財団では、市の学校へのアウトリーチ事業を本格実施するにあたり、ST スポットと協議。ST スポットを事務局とし、財団と教育委員会、市内の公的文化施設などを繋いだ「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」を 2008 年に立ちあげた。 ・現在では、アート NPO/民間芸術団体 13 団体、市内の文化施設 12 施設をネットワーク化したプラットフォームとなっている。

事例 10：地域の福祉の伝統を基盤に日本最大のアール・ブリュットコレクションを構築（滋賀県）

滋賀県立美術館では、2017 年から、障害者が制作した美術作品のコレクションを開始。現在では収蔵数 731 点と日本最大に。

→地域の障害者の文化芸術活動の蓄積を踏まえ、県が明確な指針を策定。それに則って専門家を雇用し、戦略的に実現。

項目	概要
事業・団体名称	滋賀県立美術館　アール・ブリュット・コレクション 滋賀県文化スポーツ部
事業概要	▶滋賀県立美術館は、日本の公立美術館で唯一アール・ブリュットの作品をコレクションする方針を持つ美術館。2023 年日本財団から 500 点以上ものアール・ブリュット作品の寄贈を受けたことから、現在では、日本最大のコレクションを保有している。 ▶また、アール・ブリュットの作品の常設展示や、障害者に向けた企画展も積極的に行っており、障害者アートについて国内の中核的な美術館の地位を確立している。 ※アール・ブリュットとは「芸術の教育を受けていない人たちによって制作された独自の表現を指す概念」として、1940 年代にフランスの画家、ジャン・デュビュッフェが提唱したもの。定義上は様々なものが入るが、デュビュッフェが精神障害をもった人の作品を主に紹介していたことから、日本では、主に知的障害者が制作した作品を意味することが多い。
事業実施経緯	・滋賀県では「日本の障害者福祉の父」と呼ばれる糸賀一雄が戦後まもない 1946 年に創設した近江学園で、粘土を利用した造形活動が行われ、以降、滋賀県内の福祉施設の多くでも造形活動が先駆的に展開されてきており、2004 年には近江八幡市に、滋賀県社会福祉事業団運営の「ボーダレス・アートミュージアム NO-MA」が開館している。 ・こうした地域の障害者の文化芸術活動の蓄積を受け、2012 年、滋賀県では、アール・ブリュット発信検討委員会を設置し、滋賀で生まれた美の一つとして、アール・ブリュットを発信、福祉の現場での創作活動を支援していく、障害のある方の公募展を開催する、美術館がアール・ブリュット作品を収集し、展示もしていくということを定めた。これを受け、滋賀県立美術館では、2014 年にアール・ブリュット担当の学芸員を雇用、作品収集方針を定め、2016 年度から収集を始めた。 ・さらに 2021 年には、美術館のリニューアルにあわせて、アール・ブリュットについての著作があり、それまでも滋賀県でアール・ブリュット関連のアドバイザーを務めていた保坂健二朗を館長に招き、積極的に収蔵（18 作家 182 件）や企画展などを実施。 ・上記の活動および日本財団と滋賀県とのつながりを実績として、2023 年、日本財団が管理していた「アール・ブリュット・ジャポネ」出展作品 44 作家 550 件の寄贈を受けた。